

6-1					
主題	家族との関わりを深めるために「手作り餃子大会」を行うことによる影響と効果に関する研究				
副題	家族と職員が共に入居者を支えていけるような信頼関係の構築について				
キーワード1	家族	キーワード2		研究(実践)期間	20ヶ月

法人名	社会福祉法人 聖救主福祉会
事業所名	特別養護老人ホーム 深川愛の園
発表者(職種)	久米靖浩(介護職員)
共同研究(実践)者	澤登春明(介護職員)、廻将平(介護職員)、他スタッフ

電話	03-3641-1905	FAX	03-3641-1976
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	「神様の守りと導きの中で赤ちゃんからお年寄りまで、いろいろな人が一つ屋根の下で暮らせるように」と、門前仲町という下町で1999年4月より事業を始めました。特養80床・ショート8床・デイサービス・地域包括地域センター・居宅介護支援事業所・保育園・キッズスクール・教会が同一建物内にあります。
------------------	--

**《1. 研究(実践)前の状況と課題》**

① どんなに大事な身内でも、「施設」に入れてしまえば、“後はおまかせします”という家族が少なくない。理由はそれぞれにあると思うが、面会に来るも月1回だったり、数か月に1回だったり、全く来ないご家族もいる。また、面会に来ても、特に何もなく数分で帰ってしまう。

② 「施設」のイメージはまだ一般的に正しく理解されておらず、自分の家族が入居していることを人に知られたくない、大事な家族を預けてしまったという罪悪感で足が遠のいてしまうという声を聞く。また、施設に来て、施設に対して慣れていないため、戸惑ってしまい、更に職員も忙しそうで話し掛けづらいといった理由で、間が持たず早々に帰ってしまう方も多い。

上述のような状況があり、入居者に対して、家族と職員間での信頼関係の構築が重要と考え、「家族プロジェクト」を立ち上げる事とした。

**《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》**

・仮説

① 家族との交流の場を設け、施設や職員への理解を深めることが、入居者を共に支えていく存在であると認識できるような機会づくりとなるのではないかと？

② かけがえのない家族と共に過ごす時間が増えることで、より家庭的な空間が生まれ、入居者の生き甲斐に繋がるのではないかと？

③ 家族と職員との交流を深めることで、信頼関係が生まれ、入居者に対しての職員のアプローチに理解を得られるのではないかと？また、その事で家族がどのように施設と向き合っていくのかを考えるきっかけとなるのではないかと？

・目的

① 家族と一緒に過ごす時間を増やす(回数の増加、時間の延長、場所の多様化など)

② 入居者と家族と職員が共に楽しめるイベントの開催、及び継続

③ 職員のサービスマナー能力の向上

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 対象者→フロア入居者とその家族
- ② 取り組みの具体的な手法  
「手作り餃子大会」の開催
- ③ 取り組みの時間や期間、場所
  - ・2015年10月18日(日)【第1回】
  - ・2016年4月24日【第2回】※終了後、短時間の懇親会を開催
  - ・13:00～15:30 於：特養5階
- ④ 取り組みの手順
  - ・家族へ招待状を郵送（返信がない場合は電話で出欠確認する）
  - ・入居者と家族を主体とした役割分担表、及び入居者の食事形態一覧を作成。
  - ・当日職員は衣裳（中華風）を着用。
  - ・厨房で皮の素（種）と具を事前に準備。
  - ・皮を作る班と具を作る班で同時進行し、出来上がったものから火を入れる。
  - ・なお、餃子作りに関わる人は全員、手袋、マスク着用を徹底し、衛生面に配慮。
- ⑤ 取り組んだ職員数や構成  
フロア職員9名（明けと公休含む、当日の夜勤者は除く）、栄養士、ケアマネージャー、他有志参加者（他フロア・他部署の職員）
- ⑥ 必要とした道具や費用  
道具：電気コンロ、ホットプレート、鍋、麺棒  
ラップ、お皿、箸、ポン酢、油など  
費用：入居者 50円（おやつ代と差換え）  
家族 200円（当日徴収）

### 《4. 取り組みの結果》

第1回で家族参加は11名。入居者も28名参加し、18名が餃子を食べることができた。また、第2回では他フロア入居者やそのご家族も招待し、家族参加が23名と増え、入居者は22名が餃子を食べることができた。

餃子を作る際、家族が率先して参加してくれた為、殆どの入居者が一緒に皮を伸ばしたり、具を包んだりすることができた。

家族と職員は交流を深めることができ、更に家族同士の交流となったことが大きな収穫だった。

### 《5. 考察、まとめ》

- ・家族や職員と「共につくって」「共に食べる」ことが、入居者の新たな表情を引き出すきっかけとなった。
- ・一緒に暮らしていた頃の家の雰囲気回想することに繋がった。
- ・普段、入居者も職員も一日の予定に追われ、忙しい日常を送っているが、家族や職員と共に有意義な時間を過ごした事で、特別な一日になったという感想を頂いた。
- ・家族が同じ時に同じ場所に集まったことで、家族同士のコミュニケーションが生まれた。
- ・交流を通じて、家族も職員も互いに遠慮している部分が多くあったことを知る事ができた。その為、家族から“今後はもっと協力していきたい”というありがたい言葉も頂いた。
- ・以降、家族来訪時の職員への声かけが増え、また職員も声を掛けやすくなった。
- ・今後もより多くの家族に参加いただけるように継続、発信していく。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《7. 参考文献》

くらしのきほん

皮からつくってモチモチ おいしい餃子 1と2

<https://kurashi-no-kihon.com/articles/93>

(閲覧日) 2015.10

### 《8. 提案と発信》

家族が施設に足を運ぶ機会が増えることは、入居者の生き甲斐となる。また、入居者に対しての職員のアプローチにも理解を得られやすい。

ここで提唱している「家族プロジェクト」では、家族と職員が信頼関係を構築し、共に入居者を支えていく“家族ケア”となることを目的としている。その為に、このような家族参加型のイベントを工夫しながら随時開催していくことで、「家族」が「施設」に慣れ、足を運びやすくする一つのきっかけとしていきたい。